

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会：【課題B】競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

■ 2023年8月31日(木) 10:10 ~ 12:10 | 血 RYB1 良心館地下1階 R Y B 1 番教室

競技スポーツ研究部会【課題B】テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

[競技スポーツ-SB-1] 日本サッカー協会の指導者養成システム

*西川 誠太¹ (1. 公益財団法人 日本サッカー協会)

[競技スポーツ-SB-2] 小学生年代を指導するコーチのあり方

*中山 紗織¹ (1. 筑波大学)

[競技スポーツ-SB-3] ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

キャリアパスの視点から

*北村 麻衣¹ (1. 学習院大学)

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1（良心館地下1階 R Y B 1 番教室）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

[競技スポーツ-SB-1]日本サッカー協会の指導者養成システム

*西川 誠太¹ (1. 公益財団法人 日本サッカー協会)

<演者略歴>

2022-現在 公益財団法人日本サッカー協会 指導者養成ダイレクター

2021 同上 ユース育成サブダイレクター

2017-2021 同上 JFAコーチ 関東地域担当

本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」のなかでも、「コーチ養成システム」について公益財団法人日本サッカー協会（以下、JFA）の事例を紹介する。JFAは「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する」という理念のもと、代表強化・ユース育成・指導者養成・普及の“四位一体”を掲げている。指導者養成は、指導者養成講習会・チューター制度・リフレッシュ研修会の3つを柱に事業を展開している。指導者養成講習会は、子どもを対象としたD級ライセンスからプロ選手を対象にしたS級ライセンスまでのコアとなるライセンスに加え、指導者の多様な学びのニーズに対応すべく、ゴールキーパーやフィジカルなどポジションや分野に特化したライセンスも提供している。育成年代に特化したライセンスも2007年から始めており、今年これらを更にブラッシュアップしたところである。これらJFAの指導者養成システムの現状と今後について紹介し、これからの日本全体のジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成のありかたについて議論したい。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1（良心館地下1階 R Y B 1 番教室）

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

[競技スポーツ-SB-2]小学生年代を指導するコーチのあり方

*中山 紗織¹ (1. 筑波大学)

<演者略歴>

筑波大学体育系助教（博士・コーチング学）。専門はハンドボール、小学生年代の子どもに対するコーチング、指導者育成。大学院在学時には、ドイツ・ライプツィヒ大学スポーツ科学部へ留学し、U10チームでコーチング活動を行った。現在は教育・研究活動に加えて、小学生チームでコーチング活動を行っている。

小学生スポーツを取り巻く課題として、全国小学生大会の在り方や公式戦の1試合あたりにおける個人の出場時間数の偏り、暴力やハラスメントなどの不適切な指導、早期専門化によるバーンアウトなどが挙げられている。また、国内外のさまざまな競技において、小学生時代に競技を始めた場合、将来オリンピックやプロ選手として活動する確率は低いことが報告されている。

これらの諸問題の解決を目指して、すでに国内においてさまざまな取り組みが行われている。例えば、サッカーでは2011年に8人制が導入され、バスケットボールでは2015年にマンツーマン防御が義務化、柔道では2022年に全国小学生大会・団体戦が廃止されている。これらの取り組みの背景、すなわち多くの子どもにとって将来スポーツが彼らの人生を彩るものになるようなコーチング活動を実現させるためには、大人のスポーツ活動のコピーや分解による簡易化ではなく、子どもには子どもに適したものがあるということを前提に取り組む必要がある。本発表では、ジュニア期の初期段階としての小学生年代に焦点を当てて、具体的なコーチングのあり方、トレーニングの方法および内容について考えていく。

テーマ別シンポジウム | 競技スポーツ研究部会 | 【課題B】 競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに効果的に行うか

競技スポーツ研究部会【課題 B】 テーマ別シンポジウム／ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

コーディネーター：小谷 究（流通経済大学）

2023年8月31日(木) 10:10 ～ 12:10 RYB1 (良心館地下1階 R Y B 1 番教室)

本横断領域部会における解決すべき上位の課題のひとつが「競技スポーツにおけるコーチ養成をいかに行うか」である。日本では、子どもたちの豊かなスポーツ活動を整備するため、運動部活動の地域連携や地域スポーツクラブ活動連携がすすめられている。その一方、ヒューマン・ライツ・ウォッチの報告では、日本の子どもがスポーツのなかで、暴力等の虐待を経験することが多く、その結果、スポーツが痛みや恐怖、苦痛をもたらす経験となっていることが指摘されている。このように、日本のジュニア（育成年代）競技は、コーチによるプレーヤーへの暴力等の虐待を含む、様々な課題を抱えたまま、組織的な移行期をむかえているといえる。もちろん、組織的な移行自体が課題解決の一方策ではあるものの、それだけでは子どもたちの豊かなスポーツ活動の実現には繋がらないことは明白である。そこで、本シンポジウムでは「ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成」をテーマとして設定し、コーチ養成のシステム、指導法、コーチのキャリアパスの視点からジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成にまつわる課題を洗い出し、今後のコーチ養成について議論する。

[競技スポーツ-SB-3]ジュニア（育成年代）競技スポーツのコーチ養成

キャリアパスの視点から

*北村 麻衣¹ (1. 学習院大学)

<演者略歴>

学習院大学スポーツ・健康科学センター准教授。筑波大学と鹿屋体育大学による3年制博士課程「大学体育スポーツ高度化共同専攻」に在籍中。日本バスケットボール協会において、指導者養成委員会ワーキンググループに所属し、コーチデベロッパーとしても活動している。

バスケットボール女子日本リーグ（通称 WJBL）には現在200名程度の選手が所属している。この選手たちは高校卒業後、大学に進学するか、WJBLに入団するかを進路を選択する。7～8年前までは高校卒業後にすぐ WJBLに進む選手の方が圧倒的に多かったものの、2年前には大学卒業後に WJBLに入団した選手が半数を超え、進路選択の幅が広がってきている。

また、引退後のセカンドキャリアについても、大学院に通い直す選手やコーチを志す選手、学生時代にできなかった留学経験をする選手など、辿る径路が多様化してきている。さらには、現役中に起業する選手や、選手とコーチのどちらも行おうといったデュアルキャリアを歩む選手も現れ始めている。こうしたことから、女子バスケットボール界では、「自分らしい生き方を実現していく過程」であるキャリア発達への注目度が高まっている。

本報告では、女子バスケットボール選手が実際に辿ってきた進路・キャリア選択過程について、いくつかの事例を示しながら、選手のキャリア発達をサポートするために、ジュニア（育成年代）選手のコーチには何が必要であるのかを議論したい。